

「血液型信仰」 批判再考

— 「人間」と「科学」の接続をめぐる試論—

小 馬 徹

はじめに

標記の論題で今ここに書き記そうとするのは、本学（神奈川大学）人間科学部の創設に伴って今年度後期に開講された（専門科目の一つである）現代社会人類学の、一種の講義録である。しかも完成稿ではなく、高々、或る日の未熟な講義のための手控えを急いで文章化したとでもいう程のものでしかない。一人の受講生の求めに応じて急遽試みたその講義は、実は今日やり終えたばかりであり、内容の吟味と再検討はまだこれからの課題なのである。

大学の講義は、毎度が一度限りのライブだという点にこそ、教えられる側だけでなく、教える側にとっても、何物にも代えがたい意義と醍醐味がある⁽¹⁾。だから、大学教育で最重要視すべき事柄は、講義のもつ緊迫した「一回性」に託して教師が学生と交流しながら授業を作り上げていく、その過程自体である。そう信じている私にとって、今回の学生の側からの働き掛けは誠に嬉しいものだった。

しかしながら、理想の実現はもちろん容易ではない。今度の場合も例外ではなく、慌ただしい日常の中にある数日の内に、寸暇を惜しんで何とか講義ノートを書き上げるしかなかった。つまり、学生の意欲と自発

性を即座に受けとめて、機を逸することなくシラバスの流れに組み入れようとするれば、(いわば学生がレポートを書くのにも似た) 即興的な手法に訴えざるをえない。関連資料や先行研究を涉猟する暇は、極度に限定されてしまう。それゆえ、むしろ文献探索の手をあえて広げ過ぎないようにして、その時点での極大の能力を振り絞り、手持ちの資源を総動員して事に当たるのが、結局は上策になるといえる。しかしながら、なお且つ学生たちには明快な切り口で確たる論点を示して、きちんと言質を与えなければならない。

もっとも、今回私がそれを満足に為し得たとは思えない。にもかかわらず、自らの恥を顧みず、勇を鼓してあえて講義内容の委細を公表して批判を請おうとするのには、それなりの理由がある。一言でいえば、今回たまたま私に向けられた一学生の素朴な問い掛けは、新設されて間もない人間科学部の教員が各々の専門性と学問観を背景に、まさに今この時点で考え抜くべき一般性を持っていると思うからだ。

一、問題の所在

当の学生が私に向かっておずおずと発した問を整理して敷衍すれば、ほぼ次のようになるだろう。自分は(他の多くの学生たちと同様に)血液型による性格判断(血液型占い)を信じてきたし、今でも信じている。そのような判断が非科学的だという批判は、もちろん一応は理解できる。それでも、その理解が血液型性格判断に対する自分の信頼——直接的な体験の明証性という実感——に何ら変化をもたらすわけではない。すると、自分の方が間違っているのだろうか。では、自分の感受性や思考法のどこが、どうおかしいのか。結局は、(科学的な論証という論理に感応して強く心を動かされることがない以上) 大学で人間科学を学ぶには

適さないということなのだろうか。

もし私のこの受けとめ方が間違っていなければ、これは誠に切実な、内面の葛藤の黙し難い吐露ということになる。彼女の不審は、詰まるところ、「人間科学」という概念を構成する、「人間」と「科学」という二つの基礎概念の相互関係に向けられているといえよう。少なくとも、この学生にとっては、「人間」と「科学」とは、自明のものとして何の疑いもなく接続される類の概念ではあり得ない。「科学」（という論理）は、はたして「人間」（という現象）を解明して説明できる、包括的な原理なのか。言い換えれば、「人間」を対象とする場合も、物に対するのと全く同様に、科学の審判はやはり最終的で絶対的なものだといえるのだろうか。彼女はおずおずと、いかにも朴訥な仕方、そう問を発しているのだ。

やや議論の抽象度を上げれば、この学生は、科学を万能視し、また絶対化して省みない西欧近代のイデオロギー全般に対する感覚的な違和感と、その違和感に由来する不審感を抱いているのだ。つまり、自分には確かな手応えのある生（*Leben*）の実感（直接経験の明証性）に即しつつ、それを根城として素朴な、それゆえにこそ容易に譲り難い、誠に根が深くて適用範囲の広い疑問を投げ掛けているのだといえよう。

この学生の率直な問い掛けと繊細な心の襲に寄り添おうとせず、科学至上主義一辺倒で強弁して反論を加えてみても、恐らく事は片づくまい。そうしたやり方では、彼女の心底に重く蟠っている凝りはほぐれずに抑圧されて、益々深く沈潜して行くばかりだろう。ましてや、頭ごなしに応答したり無視を決め込むのは、教員の思考停止でしかない。

そこで今日の講義では、まず彼女が提起した問題の具体的な次元、すなわち血液型に基づく性格診断〔占い〕の妥当性をめぐる評価の議論から始めた。

この点については、認知心理学者菊池聡（きくち・さとる）による平明な評論が便利で、手頃な手引きになってくれた。菊池は、まず血液型性格相関説の科学的次元と通俗的次元（彼のいう「血液型信仰」）をその原理と方法論にまで遡及し、念入りに腑分けして区別する。そのうえで、「血液型信仰」が多くの日本人の心に既に深く浸透していて、それが根拠となって様々な差別が現実にも生み出されていると、強い姿勢で警告を発している。この限りで、菊池の議論は正当なものであると言えるだろう。

しかしながら、彼の評論には、一面で重大な陥穽がある。それは、実体的な「性格」なるものの存在をなぜか無前提に措定していて、しかもその土俵で議論を構築することの正当性には毫も疑いを差し挟んでいないことだ。

ただし、必ずしも心理学研究者の誰もが菊池のような立場をとっているわけではない。例えば岸田秀は、確実な基準で類型化された「性格」などはどこにも無いと明言する。すなわち、岸田は心理学一般の前提そのものも一旦疑って、謙虚に問い直す姿勢をもっている。それは、いわば相手の側に立って将棋の盤面（つまり視座）をぐるっと半回転させて読み直したうえで状況判断する態度に譬えられよう。

いずれにせよ、この二人の心理学者の考え方の間には、人間の心理現象を実体論的に捉えるか、あるいは（無数の可能な対人関係の可塑的な束として）関係論的に捉えるかという点で、根源的な差異が横たわっている。しかもその差異は、鋭く対極をなして、二律背反の関係にある。

私は、以上のような大まかな展望のもとに、まず菊池の科学至上主義的な血液型性格判断（「血液型占い」）批判の論理を丹念に再検討する。次には、岸田の立論の方向に沿って、菊池が依拠するという近代科学の

論理を一旦相対化してみる。それから、目をさらに（心理学などの）近代科学の外側——いわば将棋盤から碁盤、あるいはその逆方向——へと転じて、近代科学の論理とは異なるもう一つの論理である「古い」型の思考——一応、その内包をあえて民間信仰として緩やかに括っておこう——を参照する。そして最後に、その結果を受けて、この型の論理の社会的な意味を考察する。

さてここで、あえて小稿の結論を次のように、予備的に素描しておこう——（恐らく心理学研究者など）以上の論旨に既にいささかの疑念を抱かれたかも知れない読者に、小稿の展開全体の一層明確な見通しを持ってもらうために。

（広義の）社会学の特質である関係論の立場から人間を理解する場合、（相手の側から自分の将棋の指し手を読むような）相対的な視点がどうしても不可欠だ。すると、小稿でも、（近代科学的な）合理性に潜む不合理、ならびに（非近代科学的な）不合理性に見出し得る合理という、事の半面の論理的な可能性を見極める必要がある。それらは、学校教育を通して科学に絶対の信をおくように主体化されてきた現代の日本人には、隠蔽され、意識から遠ざけられて抑圧されている、別の可能性なのである。

実は、構造言語学者ソシュールに学んで独自の生命論・言語論を展開した丸山圭三郎が主張するように、人間の意識は言語による認知（外部環境の分節と秩序化による世界化）と共に生まれ、無意識（反秩序）もまた意識（秩序）と共に起的に分節されて——つまり関係性として——成立したと考えなければならない [丸山、1987]。つまり、意識をもっている人間は、（デカルト等が考えたような仕方、単純に）意識のみを生きているのでは決してないのである。

そこで、社会人類学的な視点に立って考察の抽象度を高め、「文化の

技術」または「生の技術」という概念を導入してみたい。すると、ともすれば（自然）科学の婢に墮してしまような窮屈で偏狭な、また時には居丈高で抑圧的でもあり得る類の人間観——それこそが件の学生の心に重くのしかかって素朴な不審を抱かせているものだ——を克服できる糸口が把めるはずである。そして、個々の（ことに非西欧や西欧の縁辺部の社会の）文化が歴史的に形作ってきた（経験的に）無理の少ない心組みの内に、安らいだ豊かな知恵をもう一度あらためて見出すことができるようになるだろう。

21世紀というグローバリゼーションの時代に、仮にも「人間科学」が学問として呼び出されるにふさわしい独自の意味をもち得るとすれば、それは（近代西欧に固有の論理でありながらも）現代世界を一元的に遍く支配しているモダンな「科学」と、（各地の長い固有の歴史に根ざした多様な生を具体的に生きる）「人間」との間の、あり得べき、幸せで創造的な関係を構想する知のための学とならなければならない。

二、菊池聡の「血液型信仰」批判

この章では、心理学者菊池聡の評論 [菊池、1998a、1998b]⁽²⁾ を取り上げて、「血液型信仰」の現状と問題点を明らかにしてみよう。

今日、世界の国々の中でも、血液型による性格診断が広く大衆的に普及していて常日頃人々の口の端に上るのは、ほぼ日本だけである。それゆえ菊池は、この特殊な事態を一種の信仰（「血液型信仰」）と呼んで、強く批判的な姿勢で論評を加えている。まず以下に、その論旨の概要を紹介する。

1. 古川竹二の先駆的な学術研究

菊池によれば、(恐らく 1990 年代後半の) 各種の世論調査では、回答者のほぼ 60 パーセントが ABO 式血液型性格判断を信じていて、迷信と見る者は約 20 パーセントに過ぎない、という結果が出ている。芸能人や作家などの紹介文には決まって血液型と星座が書き添えられていて、大学でもゼミ選びの資料として教員に血液型を尋ねる学生が珍しくない [菊池、1998a: 30]。

しかし、心理学の専門家はほぼ一致して、血液型性格判断に対して否定的な見解を持っている。

だからといって、彼らは、血液型の科学的研究を頭から無意味だと考えてきたのではない。現に、1980 年代から 1990 年代にかけては、研究者が様々な工夫を凝らして、大挙してこの課題と取り組んだ。また現在でも、心理学や社会心理学の学会では、血液型に関する研究報告が少なくない。ただし、その関心の焦点は、無根拠な血液型信仰が安易に信じられている原因へと大きく移っている [菊池、1998a: 30-31]。

そもそも、ABO 式血液型と性格の相関性の研究は、女子師範学校(お茶の水女子大学の前身) 教授だった古川竹二が創案した。古川は、1927 年、心理学の専門誌に「血液型と性格」と題する論文を発表する。同論文は、海外でも注目され、日本では軍が彼の説を部隊編成に適用する可能性を探ろうとした。古川は、当然ながら、科学の定法に則って資料と分析方法を明示していたので、300 以上もの後続論文を誘発することになった。このように、血液型研究は、生産性と検証可能性の高さという利点をもっていたのだ。だが、皮肉にもそれが古川の研究結果が短命に終わることにも繋がったといえる。ただし、こうした経緯は科学的な研究と学問的な論争の本来あるべき姿でもあるとして、菊池は一連の研究史にそれなりの評価を与える [菊池、1998a: 31-32]。

2. 「血液型論者」の挙証の問題性

菊池によれば、1970年代以来の日本における血液型性格判断の爆発的な流行は、一見古川説の復活であるように見える。しかし、実は極めて異質なもので、「血液型信仰」ともいうべき様相を色濃くもっているという。

その近年の流行の発端は、作家である故能見正比古の著作、『血液型でわかる相性』が大評判を呼んだことにある。能見正比古と軌を一にする論者には、彼自身の子息である能見俊賢や、鈴木芳正などがいる。彼らは、能見正比古同様、いわば大衆向けの「布教」に専念する戦略をとっている。「能見」（正比古？）は、愛読者カードを利用した数万人規模のアンケート調査で主張が明確に実証されたというが、好意的な立場の者からだけ寄せられた資料は無意味だ。とはいえ、議論の叩き台としてなら役に立つだろう。ところが、その資料も分析方法も公表されておらず、学問上のルールである立証責任がすっかり回避されている、と菊池は批判している [菊池、1998a: 31-32]。

つまり菊池は、「血液型論者」たちの挙証は、専ら意図的な曲解に過ぎないとする。彼の諸々の批判には、赤子の手を捻るとでも形容できるほどの圧倒的な力があり、「血液型論者」たちは完膚なきまでに叩きめられている。

例えば、血液型論者は、「政治家にはO型が多い」という推断の挙証として、衆議院議員にはO型の者が著しく多いという事実を用いている。菊池も、1970年代に限れば確かにそうであって、一応蓋然性を推定する根拠にはなり得るだろうという。しかし、同時代の参議院議員、1990年代の衆議院議員、さらに地方自治体の首長たちについては、そうした事実は少しも無い。菊池いわく、血液型論者のこの仮説は、10

万回もジャンケンを繰り返せば10連勝する偶然もあろうが、いわば、その偶然の現象をもって挙証したとするに等しい〔菊池、1998a: 32-33〕。

血液型論者は、自分たちの仮説にうまく合う個人を見つけ出しては、*型の性格の例証とする。だが、この論法を用いて全く正反対の例を見つけるのは、いかにもた易い。だから、血液型論者の手口はわけても悪辣なやり方だ、と菊池は指弾している〔菊池、1998a: 32〕。いわば、巴御前を例として、女性（一般）の運動能力は男性（一般）に勝ると言い立てるようなものだ、ということになるのか。

血液型論者たちは、本来、適切なサンプリングを行っただけで、或る資料の或る値が母集団全体に占める比率や、各項目の平均値を示す必要がある。だが彼らは、仮説の検証に不可欠な、こうした統計処理の手続きを少しも踏まず、アンケートの取り方や回答の信頼性・整合性、指標の予測力すら吟味していない。それゆえ、「血液型性格相関説」を正しいと認めるべき科学的根拠は（少なくとも現時点では）どこにもない〔菊池、1998a: 31-33〕。

要するに、大衆雑誌の「心理テスト」は、心理学で用いられる「性格テスト」とは質的に大きく異なるものだ、と菊池は強調する。

3. 血液型性格相関説の反社会的側面

それでは、かくも恣意的で脆弱な基盤しかもたない血液型性格相関説（や星座占い）が今日の日本で広範に信じられ、受け入れられているのはなぜかと、菊池聡は自ら問を發する。そして、何よりも、「実際に当たっている」という実感が血液型信仰を支えているのだ、という。

菊池がまず援用するのは、大村政雄（日本大学教授）の「フリーサイズ効果」という仮説である。人は誰でも、様々な側面を兼ね合わせた性

格をもつ複雑な存在であり、時と場合に応じて多彩な対応をする。他方、「血液型占い」の表現には、曖昧な解釈を（意図的に）許す例が多い。それどころか、互いに矛盾し合う表現が含まれていることも稀ではない。この種の曖昧な表現は、占い〔解釈〕の方向性が当人の解釈を適格的に誘導する巧妙な仕掛けであって、読み手（聞き手）には「実際に当たっている」という実感がほぼ確実に伴うことになる。試しに、血液型（や星座）占いの一覧表を項目ごとにはらばらに切り離して、見出しを隠して読んでみよう。すると、どの項目も自分の場合に実にピッタリ当てはまると思えるはずだ、と菊池はいう〔菊池、1998a: 34〕。

くわえて菊池が重大視するのは、血液型占いの、決して軽微とはいえない反社会的な側面である。

若者たちがしばしば血液型占いの効用として挙げるものは、例えば合コン（合同コンパ）での出会いのような初対面の状況で会話の糸口が確保できるという、実利的な役割である。その一方では、主観的で感情的な判断を客観的だと装う、狡猾で無責任な手段ともなっていると、菊池は主張している——「あの人感じ悪い」、「だって*型だからね～」という風に〔菊池、1998a: 34〕。

さらに菊池の評論は、血液型信仰が見かけほど無邪気なものではなく、もっと重大な社会的弊害を伴っていて、そこにこそ排撃すべき理由があると主張している。就職試験の合否、人事配置、（たとえば保育園の）学級編成などの判断材料として、血液型性格判断が用いられているらしいのだ〔菊池、1998b: 25-26〕。

菊池は佐藤達哉が実施したアンケートによるイメージ調査を引いて、几帳面で真面目な A 型、おおらかな O 型、明るいがいい加減でわがままな B 型、（二重人格風で）変わり者の AB 型、という類型評価の（標準的ともいえる）実例を紹介している。そして、血液型性格判断が、多

数者（A型・O型）による少数者（B型・AB型）の差別であるという点で、少数民族差別や企業での女性差別と同様の構造的な差別性をもっている、と述べている〔菊池、1998b: 27-28〕。

もっとも、彼はまた門田秀夫の著書（『人権問題入門』明石書店）から、興味深い具体例として、或る化粧品会社が女性社員採用試験に「B型一〇点、O型九点、AB型六点、A型三点」という採点基準を用いていた事実が発覚したことを引用する〔菊池、1998b: 26〕。すると——菊池がこの事例を紹介した意図には反することになるのだが——性格の評価には相対的な面があって、業種などの社会環境によっても可変的だということでもあろう。暫く後で取り上げるように、女子学生たちが強い反応を示して異を唱えたのたのは、実は、標準的な評価基準を逸脱したかのような、この面だったのだ。

菊池はここで矛先を報道機関に転じて、こうした風潮がマスコミ報道で批判されることはなく、むしろその無批判な報道による容認が信仰を助長した、と非難する。人権に敏感だとされる朝日新聞も、この場合、少しも例外ではないらしい。それどころか、逆に、同紙は血液型によって商品開発チームを組んだ企業を紙面で紹介したことがあったそうだ。或る心理学研究者から抗議を受けた朝日新聞側は、「そうした会社があることは事実」であるからその事実に基づいて「中立的」な態度で報道したと述べて反論した、と菊池は慨嘆している〔菊池、1998b: 28〕。

私なりに菊池の批判を端的に要約すれば、血液型性格相関説は——性、国籍、エスニシティ、肌色、髪の色・形状、生まれ順、体格、障害の有無のような——プレスク립ティブ（生得的）な属性に関する謂われなき差別の一つだ、ということになるろう。なるほど、もし性格が血液型という、当人の人格、能力、意志、努力とは無縁な属性と強く相関しているとされるのであれば、血液型に言及すること自体が、そうした差別に

直結するハラスメントになるであろう。

それゆえ、血液型を履歴書に記載することを求めたり、各種の名簿に血液型を記載することを止めるべきだと菊池たちは主張する。そして、事故にあった場合の輸血に関する利便性という、従来広く流布されてきた仮構も合わせて論破している。すなわち、本人の ABO 血液型の申告が鵜呑みにされることはなく、その都度血液型が検査されるのだと〔菊池、1998b: 28〕。以上に見たとおり、血液型情報の公開にはどんな積極的な意味もないとする菊池らの主張は、首肯できるものである。

ことに、大学教員でもある菊池の大きな懸念は、大学生たちがこうした血液型性格相関説批判があることそれ自体をほとんど知らず、血液型信仰が人権問題に繋がることを想像もし得ないという事実にある〔菊池、1998b: 27-29〕。彼によると、或る女子大学のフェミニズム論の講師が、先に触れた、某化粧品会社の女子社員採用試験の例を授業で紹介した。すると、一人の女子学生が発言を求めて、A 型と B 型の得点が逆ではないかと質問したという。しかも、「恐ろしいことに、その場の大学生の多くがこれに同意した」のだそうだ。そして、後に菊池自身も、実際にはほぼ同じ経験をするようになった。要するに、「血液型で差別する側もされる側も、これほどまでに人権の侵害という意識が欠落しているのだ」〔菊池、1998b: 26〕。

それでも、菊池が血液型性格判断を講義で取り上げると、何時も学生の反応が格段に良くなる。ある日、そうした良好な反応を得ていたので、多少の期待を抱いて講義を終えようとした矢先、一人の女子学生が勢いよく手を挙げ、満面に笑みを浮かべて、次のように尋ねたという。「先生、それで結局先生は何型なんですか？ ひねくれ者の B？」〔菊池、1998b: 29〕。

4. 「闇雲な『血液型信仰』批判」批判の論理

菊池聡は、評論の最後で、血液型性格判断を撲滅しようとする自らの陣営の一部には行き過ぎがあることを率直に認めて、その論法に批判を加えている。すなわち、それらの論調が「非論理性という点では相手と同じ穴のムジナになりかねない」[菊池、1998b: 29]と危惧して、警告するのだ。この事実からも、彼の議論は一応それなりに冷静で均衡のとれたものだ、といえるかも知れない。

闇雲な撲滅論者が往々する問題のある主張として菊池が批判している類の議論の要点を、概ね、次の4点に纏めることができよう。①多様な人間を単純な4類型に分けられない、②性格は生まれつき定まるのではなく、育った環境で決まる、③血液型信仰は、血液型が性格に影響する機構を明らかにしない、④(例えば)「A型なのに、ぜんぜん几帳面じゃない人はいっぱいいる」という類の、反証のための挙証[菊池、1998b: 28-29]。そのうえで、菊池はこの4点を——簡潔にだが——逐一論駁する。それを次に見てみよう。

①について、菊池はこう述べている。「『何らかの基準によって四つに分ける発想』自体には本質的な問題はない」のであり、だから「この発想自体は心理学でも類型論という考え方で受け入れられている」[菊池、1998b: 28; 下点は引用者]。次に②に関しては、性格の発達には環境的要因が決定的だと認めながらも、新生児の間に敏感さや気分の安定性という点での変異が広く見られるという事実を挙げて、遺伝的要素も無視できないと論評する。では、③についてはどうか。「説明原理の不在」は科学理論として確かに望ましくはないが、「他の科学理論にも詳しいメカニズムが不明なものもある」ので、「この点だけから批判するのはフェアではない」と、菊池は判断を下している[菊池、1998b: 29; 下点は引用者]。

②と④についてだけなら、一応問題なく同意できそうだ。とくに④に関しては、前節で、私も（裏側からの警諭的な論証としてだが）巴御前の勇壮な気質を挙げて女性の男性に対する運動能力の優位性を挙証するというわかり易い例を考案して、菊池に賛意を表しているとおりである。

③の点も、例えば、医学的生態学とでもいうべき性質をもつ疫学 (epidemiology) の概念を参照すれば、一応、妥当だといえるかも知れない。疫学は、包括的・統計的に考察して人間の健康増進と病気予防に資そうとする現実的な医療の分野であり、原因と結果が連関する機構の解明それ自体を科学的に自己目的化してはいない。だが、それでも、疫学が実際に有益で実効的な学問であることに異を唱える者はまずないだろう。

しかしながら、①の点について、菊池は「この発想自体は心理学でも類型論という考え方で受け入れられている」ことを反論の根拠にしている。この事実が、彼の評論全体の文脈で、幾分気にかかるところだ。つまり、③でいう「他の科学理論」として菊池が念頭においているのは、主に心理学なのではないのか。もしそうだとすると、心理学（の類型論）が医学の疫学分野と同様に必要欠くべからざるものとして人間社会に要請され、許容されているといえるのかどうか——つまり、（科学理論の次元での妥当性だけでなく）社会的次元での便益性についても——慎重に吟味しておく必要があるだろう。だが、菊池にはその姿勢が全く見られない。要するに、菊池はここで、議論の次元に或る種の混乱、つまり少なくとも論理階型の混同、より辣に見れば巡環論法 (tautology) を持ち込んでいる。

結局、血液型性格判断を闇雲に批判する動きに自制を求めようとする菊池の論議の根拠は、④に関する、次のような見解に集約的に示されていると見てよいようだ。「血液型学に限らず、おおよそすべての性格理論は統計的なものであって、集団全体の傾向としてしかとらえられな

い」ものだから、「必要なのは個々の事例ではなく、統計的な事実なのである」[菊池、1998b: 29; 下点は引用者]。そして、全く同じ趣意から、こう言い切ってもいることに注目しよう。「いずれにせよ、血液型性格判断はなぜ虚偽なのか、これは提唱者が言うような性格の差が、現実に信頼できる統計データとして見当たらないという点につきる」[菊池、1998b: 29; 下点は引用者]。

真偽の一切を統計資料とその処理の仕方に還元するこの端的な言明が、心理学のいわゆる「性格テスト」とは何かを見極めるうえできわめて重要な意味をもっていることを、ここで指摘しておかなければならない。次節では、それを少し立ち入って検討してみよう。

5. 『批判』批判』批判

前節で試みた整理によれば、菊池らが峻別して止まない心理学の「性格テスト」⁽³⁾と（週刊誌上の「心理テスト」を含む）血液型性格判断の原理的な差異は、ただ一点に還元されることになった。つまり、後者では厳密な統計処理をしたデータが示されていないという、唯一の差異へと。しかも、それは同類の手法における、技術的処理の精度・確度の問題である。するとこの問題は、要するに程度、すなわち質よりもむしろ量の問題に還元できることになろう。

そうであれば、菊池らが心理学の側から熱心に行ってきた血液型性格相関説の反社会性に対する手厳しい批判——つまり、血液型性格相関説がプレスクリプティヴな属性による差別に現実に繋がっているという、社会的な害悪を生み出す側面への批判——も、冷静に相対化しておく必要があるはずだ。

仮に、統計処理の次元では技術的に問題のない（菊池らの視点では「科学的」な）資料であっても、それが社会的次元の問題を結果的に引

き起こすことがないとか、もし問題が起きても軽度で済むということには少しもならない。それらは、全く別次元の、言い換えれば論理階型を異にする、相互に独立した事柄なのだ。このことは、仮に（ABO）血液型と性格類型の相関が万一「科学的」に問題なく証明された場合を想定してみれば、わかりやすいだろう。その場合、社会的な次元での影響が現在よりも逆に遥に深刻なものにならざるをえないのは、火を見るよりも明らかだからだ。

事ここに至って、「血液型信仰」批判をめぐるこの問題は、（広義の社会学の一分野である）現代社会人類学にとっても、誠に重大な論点として浮上する。これについては、次章でもう少し立ち入って論じるが、ただここでも、その議論の糸口として、次に簡潔に触れておきたい。

確かに、先に見た菊池の「血液型信仰」の社会的側面への批判には、それなりに鋭い面がある。しかしながら、その後すぐにアメリカから輸入された最新の性格テストもまた、一種の一層「科学的」な差別原理を提供していて、単純な血液型性格判断（菊池のいう「血液型信仰」）や心理テストと同様に、日本社会にきわめて深刻な影響を及ぼしつつあるのだ——しかも、深く潜行して姿を隠しながら。

繰り返し言おう。結局、血液型性格相関説（「血液型信仰」）といわゆる心理学の「性格テスト」との間の差異は、菊池自身のいうとおり、質的であるというよりも、むしろ量的なものに還元されるのではないか。しかもその差異は資料の統計処理に関するものであり、単にその不完全性を根拠として「血液型信仰」の否定的な社会的影響を指弾できるものではない。もちろん、心理学者たちがプリスクリプティヴな要因によるいわれなき差別を批判することには、一点の誤りもない。だが、別のプリスクリプティヴな要因によって、しかも「科学的」に適正に「実証された」とする根拠をもって、そうした差別を（より強力に）生み出す可

能性がある、心理学の実践への社会的な視点からの顧慮も批判も全くなされていないのだ。これは、一体なぜなのか。

私の菊池聡の評論に対する最大の、つまり根本的な疑念と批判は、菊池が「性格」をあくまでも実体的に捉えていて、その実体性を少しも疑うことなく立論して省みない（いわば、将棋や囲碁でひたすら自分の打ち手しか見ようとしな）という、その一点にある。

三、実体論的性格概念批判

いうまでもなく、すべての心理学研究者が（菊池聡たちのように）性格なるものを実体として捉えているわけではない。逆に、関係論の立場からそれを捉える研究者も、少数ではあれ存在している。私はここで、その代表的な人物として岸田秀だけを取り上げてあえて論点を明確化し、彼の議論に集中的に耳を傾けてみたい。

岸田は、唯幻論という独自の立場から、広範な評論活動を精力的に展開し続けてきた。実際のところ岸田は、その観点から、心理学の性格概念そのものを真っ向から否定しているのだ。この意味で、彼の性格観は、関係論的な性格観をすら乗り越えた反性格観によっていると言うべきかも知れない。

この第三章では、岸田秀がそうした彼の「性格論」——正確にはむしろ反性格論——を鮮やかに論じている、「性格について」と題する評論〔岸田、1982: 197-209〕の輪郭をまず明らかにしておこう。

1. 性格類型論の「科学性」とは何か

岸田は、我々は日常生活で相手の性格を暗々裏に判断して自分の態度や行動を決めているが、その判断はしきりに誤ることになっていて、結

局あれこれ失敗を繰り返す、という認識から出発する。そして、次のように議論を進めて行く。

そもそも我々が相手（他者）の性格に拘泥するのは、その協力なしでは己の欲望を満足させられず、他者の意向が人生の重大事を左右することになるからだ。それなのに対人的な性格予想がとかく外れがちなのは、人間に深く内在する傾向のゆえである。第一に、自分に都合のいいように相手が動くものと自分勝手に思い込む——自惚れと願望による「一次的自己中心性」。とかく相手の所業が自分の利益を害したと人々が怒りがちなのは、大概そのゆえだ。第二には、「二次的自己中心性」の克服が困難なことが挙げられる。つまり人は、仮に「一次的自己中心性」を克服できても、「相手の立場に自分をおいてみるという形でしか相手の立場をとらえず、「暗黙のうちに、相手の性格というものを自分の性格と同じと見ている」のだ。『論語』の「己の欲せざるところ、人に施すなかれ」とか、『聖書』の「自分がしてもらいたいように、人になすべし」という道德律が、「二次的自己中心性」の頑な滞留を証す好例になる。というのも、これらの道德律の前提は怪我、病気、空腹などに関する一次的な（基本的な）欲求にはうまく当てはまっても、より高度の社会的欲求（つまり「二次的欲求」）の条件としては、容易に妥当しにくいからだ。例えば、金銭欲の個人的な偏差はとても大きい。さらに、自尊心はもっと複雑微妙で、いったい何を誇りとし、また何をその棄損と感じるのか、相手のそうした評価の仕方は杳として図り知れない。しかも時と場合次第で、その関係が同じ相手でも逆転することになるかも知れないのだ [岸田、1982: 197-201]。

他者は、絶えず予想を裏切るだけでなく、その裏切り方も個々別々である。とすれば、そうした複雑で不可解な他者たちの中で生きて行くには、よしんば誤っていると看做し、またどの程度のものであれ、行動指

針としての性格類型論に頼るしかなかろう。「いい人／悪い人」、「まともな人／変な人」の類のごく素朴な二分法でも、何も指針がないよりは余程まだ。それで、これまでに数多くの学者たちが、実に様々な性格類型論を提唱してきた——体液成分による「多血質／憂鬱質／胆汁質／粘液質」という気質の4分類（ヒポクラテス）、体格・性格・精神病の三要素を組み合わせた「肥満型＝回帰性性格＝躁鬱病／瘦身無力型＝分裂性性格＝精神分裂病／筋肉型＝粘着性性格＝癲癇」の図式（クレッチマー）、リビドーの発達における固着と退行に基づく「口唇性格／肛門性格」（フロイト）、リビドーが流れる方向（「外向性性格／内向性性格」）と優位する精神の4機能（思考型／感情型／直観型／感覚型）を掛け合わせて得る8類型（ユンク）等々。それらの性格や気質の類型論は、各々その時代の科学水準・思想的雰囲気や各国（地域）の伝統的人間観念に基づいて、血液の組成、血管の太さ、脳や神経組織の状態、骨相、星まわりなどに関連付けられている。また、親子の性格の類似も、遺伝と環境のどちらでも説明がつく [岸田、1982: 201-202]。

だから、いかにも根拠がありそうでも、結局それらは、「いい人／悪い人」や「まともな人／変な人」のごとき単純で便宜的な二分法と、実質的に大差がない。「性格というものは曖昧模糊としたものだから、(中略) 何と関連づけても一応の理屈は成り立つし、もっともらしく聞こえる。要するに、各人がもっている『科学的』というイメージに合致するような根拠をもってくれば、それが当人にとっての『科学的』性格類型論となるのである」 [岸田、1982: 202]。

2. 性格は実体ではない

次に岸田は、どの性格類型論も「びっくりするほどピッタリと当たる」という。その論理は、菊池聡が先の評論で紹介している大村政雄の

「フリーサイズ効果」仮説と、表面的には大きく変わらないように見える。ただし、その問題意識の懐の大きさ、そして委曲を尽した論述の的確さと鋭利さは、並大抵ではない。

一例を引こう。他の人々にはとても「気が強い」と見える人物が、なにがしかの性格判断に出合って、自分に関係する「気が弱い」という特性記述に深く納得する事実を、岸田はこう説明している。完璧な絶対者でない限り、「他の人びとに全然気を遣わず、自分の言いたいことはすべて言い、やりたいことはすべてやるという人がいるわけではないから（もしいれば、たちまち社会的に排除されるであろう）、すべての人が多かれ少なかれ『気が弱い』ことになり、この性格特性はすべての人に当てはまる」。一方、この人物が我慢して実行しなかった部分は（他人には）見えず、そうでない部分はハッキリ見えるので、他の人々は直接経験の明証性をもって、彼を明らかに「気の強い人」だと判断する。そして、もし A と B 二人の人物が互いを「気が弱い」人と思う場合があるとすれば、それは A が気が引けてできないことと B が気が引けてできないことが共通する場合に限られるのだ [岸田、1982: 202-204]。

この点での岸田の一応の結論は、こうだ。「要するに、鉄の固りとか錆びるとかの性質と同じような意味での客観的実在として、人間の性格というものは存在しないのである。性格とは、当人の内側にあるものではない。したがって、性格を当人の内側にある血液型とか、リビドーとか、体格とかに関連づかようとするあらゆる企ては無意味である」 [岸田、1982: 204]。

つまり岸田は、関係論としての性格なるもの設定は仮に認めても、実体的な性格（性格類型）などはあり得ないと、きわめて明快な判断を下している。「A と B との人間関係が、A と B との関係のなかでの A の性格と B の性格とを規定する」のであって、「普遍妥当な A の性格な

るものは存在しない。『客観的に』性格を検査するあらゆる性格テストは無意味である」と〔岸田、1982: 205; 下点は引用者〕。

岸田の見方に従うと、もし完全に無欲な者がいれば、彼にとっては「けちんぼ」は存在せず、もし完璧な人間理解能力をもつものがいれば、彼にとって「変な人」はいない。だから、誰もがこのように自分の器量に応じて、便宜的な分類によってしか他人を捉えられないのだ。しかし、そうした自前の人間分類に当てはまる相手が客観的に実在すると見るのは錯覚だ。それにもかかわらず、我々は「自分の類型論、人間観に合った人たちがたくさん『客観的に実在する』のを見出すものなのである。それは、われわれが知らず知らずのうちに、一つには、そういう人たちを自分の周りに引き寄せるからであり、また一つには、人々のそういう傾向を引き出すからである」〔岸田、1982: 206-207〕。

しかも、往々周りの人々の間で、或る人の性格の見方が或る程度一致していることがある。だが、それは、彼らがその人物の「客観的」性格を掴んでいるからではなく、その人が周囲の人々との関係を多少とも似た仕方を取り結んでいるからなのだ。また反面、これもありがちなことだが、その人がA集団とB集団とで正反対の見方をされているとしても、その一方が真実の性格で、他方が偽りの仮面なのではなく、それぞれの関係の中で共に真実なのである。いや、人間は森に木が所属するように実体として或る集団に所属するのではなく、どんな所属もいわば「仮の」ものでしかないのだから、逆にそれらの関係は共に仮のものである。例えば、Aが詰まらないと見て捨てた女性が後にBと恋愛をして、Bにとって素晴らしい女性になったとすれば、それはAの器量とBの器量とが彼女を詰まらない女性と素晴らしい女性にしたのであって、そのいずれもが彼女の真実である。要するに、他の人々の性格とは、自らの欲望と器量に応じて相手との関係の中で創り出すことになる

「何ものか」なのであって、相手の心中に存在する客観的な実在ではないのだ [岸田、1982: 207-209]。

概ねこのように論じてきて、岸田秀は、次の一文をもって、彼の透徹した性格論を終えている。

われわれは、自然科学主義の実体論的見方に深く囚われているため、すべての現象は何らかの実体があってそこから発していると考えがちであるが、このような考え方は、物理現象には適用できても、人間の心に関するいかなる現象にも適用できないことを知らねばならない。性格なる実体はどこにも存在していないのである。

[岸田、1982: 209]

3. 「性格テスト」という「万能」の物差し

岸田秀の評論、「性格について」は、菊池聡の「性格判断信仰のナゾ」の議論を相対化して、その不徹底さを余すところなく照らし出す力を持っている。その到達点から、我々は、菊池たちが「血液型信仰」の社会的側面における害悪を批判した論調の不徹底さをもまた、克明に浮き彫りにすることができよう。ここでも、その要諦は、やはり性格実体論批判にある。

菊池たちは、1970年代に能見正比古の著作『血液型でわかる相性』がブームとなって以来日本人の心に浸透した血液型信仰が、プリスクティヴな要件に基づく深刻な社会差別を生み出してきた実情を的確に批判した。その論調は、既に第二章第3節で概略を見た通りであり、彼らは（血液型信仰に迎合した）大衆誌などによる「心理テスト」と、厳格な統計処理を科学的に行う心理学の「性格テスト」とを峻別した。深刻な問題は、それにもかかわらず、「性格テスト」もまた現実に、他ならぬ

プリスクティブな要件に基づく深刻な社会差別を生み出してしまったという事態にある。しかも、その差別の仕組みは科学的であることによってより組織的で大規模であり、しかも深く潜行しながらもきわめて権力的なものであった。

数年前に、最新の心理学を応用したという、各種の「性格テスト」が続々と日本に導入された。例えば、その先鞭として、米国の或る人材コンサルタント会社が1999年4月から日本での営業を開始した。同社は、当時既に米国では38年の事業歴を誇っていて、各業種のトップ企業を含む2万社以上の取引相手を持ち、150万人分の資料を保有していたようだ。日本でもすぐに様々な業種の大手の会社と契約を結んで行った。同社の性格テストは、百数十の質問項目に答えるマークシート式のもので、業務適性や社員の相性の診断を行うことを眼目として、採用試験や新人研修の際に実施されている。同社の売り物は、その精度と解析力、ならびに肌理^{きめ}細かなアフターサービスである。いわく、本人も気付いていない心理の深層にまで遡及して性格特性を炙りだせる、とか。ちなみに、日本の或る銀行もすぐに同社に追随して、子会社に同様の「性格テスト」を開発させ、商品化して売出した。

端的に言えば、こうした「性格テスト」の最大の問題は——菊池聡らの主張とは裏腹に——その組織的で高度に一貫した統計処理の「精度」と徹底した管理の「科学性」にこそある。最新の「性格テスト」が「客観的な」資料として当事者に突きつけるのは、『『あの人感じ悪い』、『だって*型だからね〜』』という程度の、個人の恣意的で薄弱な根拠ではない。しかも、肌理の細かい徹底したアフターサービスがそれに加わるのである。

それが有無を言わさぬ「証拠」として人事査定に用いられ、リストラ^ラの材料にさえ使われかねないのだ。場合によっては暗々裏に、しかも党

派的な利害関係の脈絡で利用される場合すらあるかも知れない。当時、サラリーマンたちは忽ちそうした危惧の念に捉えられて、密かに声を挙げ始めた。それらの声の一部は、間もなく幾つもの雑誌の記事によって広く社会に伝えられることになった。しかしながら、その後それが（菊池らが精力的に繰りひろげてきた）「血液型信仰批判」のような形で共有されて公に議論されたという事実を、寡聞にして私は知らない。

だが、このような沈黙をもって、「性格テスト」の使用を合理化できる事実と見なすことは、安直にできそうもない。一旦会社が、このような「性格テスト」を導入してしまったとしよう。すると、個人が「科学的」にも、また状況的にも、有効に反論することはほぼ不可能に近いことは、誰にも容易に想像がつくはずである。事態は、秘かに深く潜行していて、社会の眼がそこに届くことはなかなかないだろう。

実は、ここにこそより重大な問題があるのだ。菊池たちは、先に見たとおり、朝日新聞などが血液型性格相関説に基づいてプロジェクトチームを編成した会社の記事を掲載したこと自体を、厳しく糾弾してきた。しかし、そうした批判を受けて「性格テスト」の報道をも自粛する機運がマスコミに行き渡り、より深刻な事実が社会から隠蔽されてしまったのではないだろうか。これは、社会的に一層危険な状態である。

問題は、事実を報道することにあるのではなく、むしろその仕方にこそあるのだ。当事者たちから偏りなく意見を聴取し、そのうえで独自の判断を示して言質を与える姿勢こそが、マスコミに求められるものだと考える。

私は、最新の「性格テスト」が招来したこの社会問題を、本稿の文脈でこれ以上詳細に論じる積もりはない。重大なのは、1998年の菊池の評論の批判的な論調の根拠をなす信のあり方そのものが、わずか一年ほどの内に現実に生起した事象によって、言い換えれば実際の歴史過程に

よって、厳しく反証されたことの方だ。

つまりこの事態は、或る人間事象の分析が科学的であることの論証が、論証された事柄そのものが原因となって社会次元で問題を引き起こさないという保証には全くなり得ない事実を、我々の目の前に厳然と突きつけたのだ。それは、換言すれば、「科学」と「人間」の接続が少しも自明でもなければ、決して容易でもないということである。本稿の文脈では、ただそのことを確認しておけば、ほぼ事足りる。

ただし、ここで一つだけ付け加えるべきことがあるとすれば、今論じている事柄こそが（小稿の冒頭で紹介したように）人間科学部の一人の新入生が私に向かって不安気におずおずと問いかけた心意に深く通底しているのである。そのことに、もう一度あらためて注意を喚起しておきたいと思う。

血液型性格相関論問題での「科学」の側の論証は、彼女にとって、心を鋭く射抜く力をもつものでは少しもなかった。だが彼女は、その事実が孕んでいる問題を「科学と人間の接続の問題」として明晰に概念化することができなかった。それでもなお、（自分自身でも恐らく舌足らずに感じるような）ぎこちなく、もどかしい仕方ではあっても、その思いにどうにか翼を与えて、私に向って訥々と問い掛けずにはいらなかったのだ。

誤解を恐れずに、それをあえて口にして問い掛けたこの学生の真率さを見誤って、矮小化してはならない。彼女がようやく曲がりなりにでも口にした疑問は、前節で見た通り、いわば岸田秀が圧倒的な説得力で代弁して、見事に展開しているといってよいだろう。

四、「占い」というもう一つの型の論理

岸田秀が試みた、性格の実在性を強く否定する論議は、既に見たとおり、誠に犀利で徹底したものである。ただ、心に留めておかなければならないのは、彼が、類型的な性格の実在は否定しているものの、性格を類型的に捉えることそれ自体を単純には否定してはいない事実である。

1. 星占いは例外か

岸田秀の述べるところは、こうである。人は誰も絶対（的な権力）者ではあり得ない以上、相手（他者）の態度と行為に欲望の実現を左右されるが、相手の実際の態度は複雑微妙で、誠に測りがたいものがある。それゆえ、社会の中で生きていくには、何らかの性格分類に頼って行為せざるを得ない。そして、それを人間的な生存の前提条件——いわば「必要悪」——として受け入れる以外に方途がない。この意味では、どんな分類も等価であって、銘々が各々の器量に合わせて作った独自の分類を基準に相手の性格を推し量るしかない。しかも、それは相手の性格を創り出すことでもある。

だから岸田は、類型論の基準としての科学的判断を特別視することもしなければ、占いによる判断をことさら眨めようもしない。このように、彼は少しも教条的な科学至上主義に陥っていない。類型論をあえて否定しないという限りでは、岸田も菊池と同じだが、「科学」に対する岸田の態度は、菊池たちと決定的に異なっている。岸田の聡明さは、何よりもまず、人間が愛憎交々生きて行く社会の次元と科学の次元とが相互に独立したものだ、と見抜いているところにある。しかも彼は、「人間」（の経験）という次元では、科学も占いも、どちらも共に一つの型

の論理として見るのであって、科学を超越的であるどころか、優越的な論理であるとしても考えてはいない。

いわば、「科学的であること」が社会的な次元では黄門様の三葉葵紋付きの印籠のごとき超越的な権威たり得ないことを、(将棋盤をぐるっと回して) しっかり見てとっているのだ。

ただし、その岸田も、「性格が星まわりによって決定されているというのはどうかと思うが」[岸田、1982: 202] と述べて、星占いについての評価だけは、いささかの留保を試みている。つまり、きわめて柔軟な心理学研究者である岸田にとってさえも、星占いはいかにも胡散臭く、やや例外的な人間事象と見えているのである。

しかしながら、性格とは実在ではないという岸田の一貫した立場からすれば、こうした不用意ともいえるべき留保は、一種の不徹底を意味しているはずである。つまり、性格類型を基にする心理学的社会論とでもいえるべき、岸田が多数の著作で繰り広げてきた犀利な関係論的な議論には、実はまだ本当に社会的次元にまで到達していない一面が残っているといえるのではないだろうか。

そこで、小稿では、岸田によって例外視された星占い(占星術)を取り上げて、占いの社会的な意味へと今一步深く踏み込んだ論議を試みたい。つまり、星占いを例として、「占い」という科学ならざるもう一つの論理を、社会的次元の或る脈絡で、科学の論理と対置してみようというのだ。ただし、小稿では、便宜的に、「占い」の語に「民間信仰」とほぼ同様の大きな内包をあえて与えていることを、予め断っておかなければならない。

2. インド社会と星占い

上記の目的に沿って議論を進めるには、現代の情報技術産業の分野で

世界を席捲するほどの大躍進を遂げながら、今もなお星占いが社会生活で圧倒的な意味をもっている、インド社会を事例とするのが最もふさわしいだろう。しかも、インドの庶民にとっての占星術の意味をインドの庶民の眼で描いた資料があれば最善だ。このような判断から、本章では、モハンダース・K. シャルマの手になる『喪失の国、日本』[シャルマ、2004] に依拠して、議論を進める。

シャルマは、1955年、インドのラジャスターン州ウダイプルに暮らすバラモン・カーストの、それほど豊かとはいえない家に生まれた。とはいえ、学才に恵まれた彼は、インドの二つの大学を卒業後、鉄道局勤務を経て或る市場調査会社に勤る。インドが1991年に社会主義的な計画経済体制から自由主義的な経済体制へと移行して間もない1992年、シャルマは市場調査のために、37歳で単身日本に派遣された。この著書の副題である「インド・エリートビジネスマンの『日本体験記』」は、この間の事情を暗示している。

人類学の専門的なフィールドワーカーとして長年経験を積んできた私の眼から見ても、シャルマは、垂涎の的ともいうべき稀に見る好条件で、異文化に暮らす絶好の機会を与えられている。何しろ、出発に先立って、上司は彼にこう言って聞かせるのだ。「日本では毎日遊んでいてもいいんだ。新聞や雑誌の広告ばかり見ているでもいい。それをインドに持って来てではなく現地で、日本の中で見、感じることに意味があるのだ。現地にいるということは、生きたさまざまな情報にさらされることだよ。判断も現地ならでは、無意識下での広い働きかけがある」[シャルマ、2004: 29]。

事実、1年8ヵ月に及んだシャルマの日本滞在中の日常経験は、或る家族との打ち解けた交流を柱として、少しも隠し立てや隔てのない、誠に現実的で、且つ深みのあるものになった。その日本体験は、一方では、

逆にインドの文化と社会のあり方を浮き彫りにして、その結果、事の半面として、彼の透徹したインド理解を導くことにもなる。以下に、ヒンドゥー教徒であるインド人シャルマの、「占星術」観とそれに付随する態度を見てみよう。

彼のモハンダースという名前は、他の多くのヒンドゥー教徒たちと同様、「出生時の黄道宮が属していた宇宙音に従ってつけられた」。また、彼が日本へ発つ日取りも、彼の誕生時に父親が占星術師に依頼して作っておいた、「誕生星表」(ジャナム・パトリカー)を基礎にして決められたのだった。東京空港到着時刻に、シャルマの守護星である木星が南の空高く掛かっている日が選ばれたのである。ヒンドゥー教徒は、結婚、新築、転居などの人生の諸々の節目で、このように、判断のために「誕生星表」を使う。そうした機会に行われる「誕生星表」を使った複雑な計算は、今では紙の上ではしなくなった。東京への出発に際しては、彼も、ニューデリーで当たりを取っている有名な占星術師に最新のコンピューターで演算して貰ったのである。赴任に伴って身に付けることになった護身用の小さな装身具の宝石の種類も、この占星術師の助言に従って買い入れた [シャルマ、2004: 21-22]。

ただし、シャルマ自身は、占星術そのものには懐疑的である。しかしながら、別の意味でそれを認めてもいる。ただし、占星術を信じている父母への敬愛と恭順の念というような、単純な理由からではない。何事についても、あれこれ口出しをして止まない大家族と親族を説得する無視できない手段として、占星術の意味を認めているのである。つまり、インド人は自説を主張して倦むことも妥協することを知らない人々であって、話し合いで何かを決定することはほとんど不可能に近いのだ [シャルマ、2004: 22] ⁽⁴⁾。

この意味で、インド独立の日の決定に纏わる逸話は誠に興味深い。一

旦決まった 1947 年 8 月 15 日という日の吉凶を占星術で占うと、あろうことか凶と出た。そこで、インド独立の時刻は、前日（14 日）の 24 時に繰り上げられたのである。この時刻は、実のところ、前もって予定されていた 15 日の午前零時でもあるのだから、実質的には変更とまではいえないだろう。だが、今生まれ出ようとする新しい国家が伝来の知恵である占星術を重視して事に当たったという結果は、社会的に、重大な意味をもったのだった。シャルマは、言う。「論理を超え、直接感情の深層に働きかけることによって統御不可能なものを統御することができる。私はそれを賢い方法だと思っている。というのも、論理は文化の形によってさまざまに異なり、あるときは互いに正反対であることもあるから、主張すればするほど相互の軋轢を生む」になるのだから [シャルマ、2004: 22-23]。

占星術は、約千五百年前にギリシャからインドに伝えられたものである。だから、ヒンドゥー教やイスラム教よりももっと古い歴史をもち、インドの数多くの民族や宗教や言語を超えた、普遍的なパラダイムの観がある。それゆえにこそ、占星術の「非合理の中に潜む合理が利用できるのだ」。マハトマ・ガンディーが独立記念日を上記のような一見非合理的な仕方を取り扱って疑いを差し挟まなかったのは、まさにこうした理由からなのである [シャルマ、2004: 23]。

形式的にどんなに合理的な論理であっても、家族、種々の共同体、地域や国家、あるいは諸民族や諸宗教を分断・対立させて社会を破壊に導くように用いられれば、社会的には非合理の誹りを免れまい。他方、表面的にはどんなに非合理に見える論理でも、統合や融和と平和に資する建設的な力となり得るのなら、それは社会的な次元でそれなりに合理的であり得る。これが、インド人であるシャルマが、諸々の言語を話す多民族から成り立ち、しかも多宗教が覇を競い合う現下のインドという国

家の社会的な実情と、国家に先行する長い歴史から学んだ、懐が深くて柔らかい知恵であろう。

インドの独立運動にも一応の関わりを持ったばかりでなく、第二次世界大戦の敗戦からいち早く立ち直って、今や世界最先端の産業大国として発展し続けている日本。その日本に、シャルマは限らない親しみと深甚な敬意を抱いて来日した。来日直後から、至る所が隅々まで清潔に保たれ、どこもきわめて安全で不正やいさかいもなく、日常生活の万端が流れるように進んで行く豊かな日本に、彼は速やかに、且つ深く魅せられていった。ところが、彼はやがて癒しようのない喪失感を胸に深く刻み込んで、予定の滞日期間を大幅に短縮すると、潔く職を辞して帰国してしまったのだった。

彼の著書の標題である『喪失の国、日本』は、人々が科学と能率を徒らに至上視して、日本の伝統文化の隅々に見られる「非合理の中に潜む合理」を尊ぶ知恵を見失って薄っぺらになってしまった、日本の現在への深い失望を表している。

シャルマが見いだしたのは、現代インドとは大きく違って、行き過ぎた科学至上主義への一辺倒の傾斜のゆえに自らの伝統にはすっかり目を瞑り、「人間」と「科学」の接続が思うようにできず、「人間」の居場所がほとんどどこにもない日本という国家の姿だった。より適切には、そうした日本が喪失してしまったものの、彼には想像を絶するほどの大きさであったといえる。

シャルマが頼ったインドの占星術師は、先に見たとおり、例えば最新のコンピュータ技術を「誕生星表」の運用に活用していた。このようにインドでは、科学の次元と社会の次元は必ずしも同一の平面で衝突し合うのではなく、むしろ相補い合う幸せな関係を実現しているともいえる。だからこそ、高度の数学を基盤とする IT 産業でインドが世界の先頭を

突っ走って目ざましい躍進を遂げながらも、なお且つ「生の技術」（「文化の技術」）をいたずらに排撃せずに、かけがえのない「資源」として有効に育てつつ、社会次元で活かそうと努力しているのである。

3. 身の周りの文化の技術

『喪失の国、日本』でシャルマが述べている、「非合理の中に潜む合理」を生かす現実的な知恵は、その作用面で見ると、膠着して動かない状況を変化させて新しい状況へと導く技術として捉えることもできるだろう。私は、別の論文で、文化人類学者阿部年晴の言葉を借りて、魔術（呪術: magic）を「文化の技術」、あるいは「生の技術」と読み換えた [小馬、2006: 92-93]。そして、社会史研究者（歴史人類学者）マルク・ブロックが『王の奇跡』でそのような技術としての「魔術」に着目して、フランスとイギリスの中世社会で、「王権が王権儀礼へと庶民信仰を包摂し、また一方では庶民が王権儀礼を受容しつつ集合表象を形作ってゆく、ダイナミックな相互過程を説得的に論じている」ことを明らかにした [小馬、2006: 90-91]。

「科学としての歴史」の「法則」を予定調和的に歴史事象（の中の人間）に当てはめ、カテゴリーカルな解釈を導いて良しとする、硬直した教条的な歴史観。それは、（岸田秀が描写したように）複雑で不可解な人間の関係性の束の総和として存在している、個々の社会の固有の姿を発見しない。これを脱して、現実の生きた人間と社会の姿とその両者を動かす論理に迫るには、何の変哲もない庶民生活から均衡と変動をともに生み出す「非合理の中に潜む合理」、ないしは「文化の技術」・「生の技術」にも注目する必要がある。

「人間科学」が考究の対象とする「人間」が、仮にも現実の歴史の中に位置づけられるものであれば、ここに述べたような方法的な省察が不

可欠になるはずだ。いうまでもなく、(実験室のような) 空白の時空に生まれ落ちる人間など誰一人なく、また誰一人としてそこで生きていくわけではないのだから。科学は本質的に無視点的なものであるしかないが、人間は一人一人が具体的で一回的な歴史の中にいる存在であり、各々が独特で固有の視点をもっている。この「人間」と「科学」の根源的な乖離こそが、本稿の出発点で発された一人の学生の問の核にあるものだと言ってよいだろう。

小稿を閉じるに前にしっかりと眼を向けておきたいのは、私たち日本人も、社会の中にある「人間」として生きていくうえで、まだ何から何まですっかり「科学」に譲り渡してしまったわけではないという、当たり前の事実である。

インドの人々が占星術に見いだしている「非合理の中の合理」は、気をつけてみれば、よりささやかな形ではあれ、(日本であれ、世界の他の地域であれ) 我々の見慣れた日常生活の様々な場面でしっかりと生き続けている。ちなみに、二、三の例をここで挙げてみよう。

たとえば、2チームが対抗して勝ちを争う形式のスポーツ・ゲームでは、それを始めるに当たっては、この種の知恵に頼ることが不可欠だ。野球(あるいはアメリカン・フットボール)型の、敵味方が攻守を交互に切り換えつつゲームが進行するスポーツでは、先攻・後攻の選択権を、また同時に攻め合うサッカー型のスポーツでは、コートサイドとゲームを初発する権利(例えばサッカーのキックオフ)のいずれかの選択を、審判によるコインのトスなど、全く偶然に依拠する行為に委ねている。

また私自身、(本学外国語学部時代の) 新入生を対象とする基礎ゼミナールの学生選考に際して、この種の知恵を活用してきた。それには、次のような理由がある。本学に赴任して間もない或る年のこと、厳格な面接と書類選考を行ったうえで、不合格とした者にはその理由を懇切に

説明したことがあった。ところが、予想に反して、学生たちの反応は怨嗟の聲に満ちた、いかにも手厳しいものだった。彼らは、大学入試で本命の大学をしくじって本学に来たのに、入学間もなくまた「落とされた」衝撃は大きくて、癒しがたいものだと言っているのだ。

そこで、その後希望者が定員を超えた年に採用した選考方法は、一種の賭のようなものである。希望者数（例えば43）よりも一枚だけ多い数（ここでは44枚）の紙片の各々に1から順に番号を書き入れてから、番号が内側に隠れるように紙片を折って数回振る。次に、応募者全員に一枚ずつその紙片を引かせ、最後に残った紙片の（例えば15という）番号を皆で確認する。そして、その次の（この場合は16という）番号の紙片を引いた者から順に、定数（20ないし、その一割増しの22）分の学生（すなわち16～35、または16～37）を採用したのである。

この場合には、各々の学生が籤を引く順番は中和されて問題にならず、全員の意志が最後の札の決定に等しく同じ度合いだけ関与している。だから、外れた学生たちも、残念がりはしても、破顔一笑、明るい気分で素直に納得してくれた。

これもまた、ささやかながらも、非合理の中に潜む合理を活かして、不必要な不和や反目を防いだ一例といえるであろう。

4. 人間と科学

「神は骰子遊びをしない」とは、現代の最も深く畏敬される科学者、アインシュタインの有名な言葉である。だが、人々の暮らしの中では、「骰子遊び」は、にっちもさっちもいなくなった状況で庶民が神意を問う、最後の手段ともなってきたのだ。

よく知られているのは、「板子一枚、底は地獄」といわれた和船が大海で難船して、乗組員たちがすっかり方向感覚を失った場合の、決断の

仕方に関するものである。全員の献策の後、最後に二つ以上の案が残って衆議一決しない場合、最終的な判断をすすんで骰の目に委ねること、つまり運を天（神意）に任せることで達観して、潔く恨みっこなしとしたのだ。だからこそ、骰子は神そのものでもあった。帆柱の基部に安置されている船霊様の御神体を構成する品々には、骰子が欠くべからざる一部分として含まれているのである⁵⁾。

ここで、或る新聞の小さなコラムで見つけた、短い記事を引用してみたい。寄稿者の64歳の女性は、小学4年生の孫を珠算検定試験会場へ送る道すがらの、ちょっとした覚醒の経験を綴っている。この女性は、「練習の積もりで」とか、「気楽に」とか、宥めたりすかしたり、また深呼吸の実施を勧めたりするのだが、初めての受験で、孫はどうにも落ちつかない。そこで、時間に余裕があったので、道の向こう側に偶々見えた寺に車を止めて、お前がお腹の中にいる時に丈夫に育つように祈った所だからと、賽銭を渡してお参りをさせた。試験が終わって会場から出てきた孫は、「できたよ。守ってくれたのかな」と言ったという。記事は、次のように結ばれている。「普段、神仏を信じないのにこんなときだけ利用したようで後ろめたいが、いくら言い聞かせても落ちつかなかった孫が平静を取り戻した。結果はどうあれ、落ち着かせてくれたお寺の『魔法』に感謝している[木村須美「お寺の『魔法』に感謝」——「ひととき」欄、『朝日新聞』2006年7月3日]。

孫を思って、切羽詰まったおばあさんがついたこの嘘を罰当たりだと咎める者は、恐らく誰もいないだろう。嘘も方便という言い方が昔からある。ただし、この女性自らが言い当てているとおり、むしろここに描かれているのは、まさしく社会人類学がいう、「文化の技術」・「生の技術」としての「魔法」（魔術）の好例とするのが、一層適切な見方であろう。それは、或る膠着した状況に変化をもたらして新たな現実を創り出す力、

あるいは窮地を切り抜けて生き抜くための技術の一つなのだ。だから、事の表面上の真偽など、ここでは決して本質的な問題になるまい。このような状況で、「深呼吸する」などの、科学の一体どんな知識がこれ以上に効果的であり得るだろうか。この場合に不可欠なのは、科学の次元の論理の貫徹ではなく、事態を動かす力を生み出す文化の次元の論理の尊重なのだ。

私自身もすぐに思い起こすことができるのだが、これとよく似た日常の小さな経験は、恐らく誰にもきつと少なからずあるに違いない。私は前掲論文 [小馬、2006] の中で、響灘の或る孤島のもっと大がかりで慣行化された知恵の事例を挙げている。くわえて、ライアル・ワトソンが今日の南アフリカの魔術に触れ、その土地に住む白人たちの科学主義的な解釈では平板過ぎて陳腐だとして、「真実はこれよりもずっと呪術(魔術)的である」[ワトソン、1983: 149] と述べたことを紹介した。

人間の心の現実とは、幾重にも重層的であって、また個人差も小さくない。くわえて、岸田秀がいうように、同じ人の心のあり方も、多彩な次元と関係と状況とで、それぞれに現れと働らきを異にしよう。それゆえに、人間の心は一義的でも機械的でもなく、実体として科学的に対象化され得るものでもあり得ない。それは、「A と B との人間関係が、A と B との関係の中での A の性格と B の性格を規定する」[岸田、1982: 205] という意味で、「ずっと魔術的」なのがある。もしお望みであれば、百歩譲って、「魔術的」を「関係的」とすんなりと読み替えてもいい。

そうした心のあり方は、「科学」の名を振りかざして安易に否定されるべきものではない。むしろ、庶民の生の営みとしての「魔術」——小稿の文脈では「占い」——は、「自己の内と外への豊かな膨らみを作り出す奥深い文化の技術の一部を構成するものであり、且つ個人と社会の生存にとって基本的な財産である」のだ [小馬、2006: 95]。

おわりに

私は、以上のような事柄をいかにも急ごしらえの講義で論じてみた。率直に言って、到底うまくいったとは思えない。

ただ、大切なのは、血液型性格相関説が科学的であるかどうかだけを頑なに云々して、問題の一切をそれに還元して済ますことではあり得ない。少なくともこの点だけは、今日の講義で明らかにできたと思う。

血液型性格判断について、(一人の固有の視点をもった人間として)直接経験の明証性を主張する学生に対しては、それがインド社会における占星術のように、或る社会的脈絡で有効な「文化の技術」・「生の技術」となり得る条件がはたしてあるのかどうか、また、もしあるとすれば、それは何なのかと問い掛けてみた。そして、これとは逆に、血液型性格判断が社会的に重大な弊害をもたらす可能性がないのかどうか、あるとすればその原因は何なのかと尋ねてみた。

このように、私にできたのは、せいぜい学生たちと一緒に現代社会人類学の脈絡で深く考えてみることであるが、それはすっかり無駄ではなかったと思う。

小稿は、一学生の促しに従って、「人間」と「科学」の接続がどのような恵みと災いをもたらし得るのか、そのあり方を自らにも問うてみた、一つのささやかな試みの報告に他ならない。「人間」が自他の関係性の中で生み出されるのと同じく、「人間科学」もまた「人間」と「科学」との関係の中で形成されるべきものであり、それは「人間」をも「科学」をも豊かにする知恵でなければならない。

しかしながら、はたしてそれがほんとうに「人間科学」として達成できるのかどうか。それが、今回一人の学生が私に語り掛けてきた言葉の、

芯をなす問であった。そのおずおずとしてぎこちない問い掛けは、しかし鋭く胸に突き刺さった。私自身の内なる問として、ずっと問い続けなければならない本質的な問なのだから。

(こんま とおる)

《注》

- (1) 放送大学でカメラに向かって講義した経験は、率直に言えば、この確信を一層強めることに繋がった。
- (2) 小稿に引用した菊池聡の二つの評論は、それぞれ1998年の2月と3月に発表されたものである。
- (3) 菊池は、大衆雑誌などに現れる「心理テスト」と、心理学の厳密な統計処理などの手続きに従って実施される「性格テスト」とを用語として峻別している。この事実を、ここでもう一度確認しておきたい。
- (4) これが徒らな誇張でないことを、我々日本人は苦い思いを噛みしめながら認めざるを得ない。国際的な会議を成功させる（唯一の）コツは、日本人を諷刺してインド人を黙らせることだと言われ続けて久しいのだから。
- (5) 先日、或る経済誌に、どう考量しても優劣の判断がつかない2つのプロジェクト構想の一方のみを採用する際に、ジャンケンで決めるという会社の記事が載っていた。この方法を採用して以来、人間関係が円滑になって、業績も向上しているという。また、こんな例もある。2007年1月、秋田大学医学部付属病院の次期院長選挙では、上位候補2名で決戦投票を3回繰り返したが、いずれも同票で決着が付かなかった。そこで、硬貨を投げ上げてその裏表で事を決すべしと多数決で決議し、実行したという。

《参考文献》

- 阿部年晴 1997 「日常生活の中の呪術」、『民族学研究』62 (3) : 342-359。
- 菊池 聡 1998a 「血液型信仰のナゾ」、『月刊百科』424: 30-34。
1998b 「血液型信仰のナゾ——後篇」、『月刊百科』425: 25-29。
- 岸田 秀 1982 『続ものぐさ精神分析』中公文庫。
- 小馬 徹 2006 「魔術を魔術と呼ぶ魔術——鏡ならざる国の文化の技術」、『神奈川大学評論』54: 87-96。

- シャルマ、M. K. 2004(2001) 『喪失の国、日本——インド・エリートビジネスマンの「日本体験記」』(山田和訳) 文藝春秋。
- 詫磨武俊 1971 『性格』 講談社。
- ブロック、マルク 1998 『王の奇跡』(井上泰男・渡邊昌美訳) 刀水書房。
- 丸山圭三郎 1985 『言葉と無意識——深層のロゴス・アナグラム・生命の波動』 講談社。
- 吉永良正 1993 『ふたつの鏡——科学と哲学の間で』 紀伊國屋書店。
- ワトソン、ライアル 1983 『アフリカの白い呪術師』(村田恵子訳) 河出書房新社。